

1月29日(日)

なみか・ほろかポイント10倍
毎週第4日曜日・西田鮮魚店のみ



1パック

1,000円 (税込)

牡蠣飯

広島産のカキが入った

西田鮮魚店

72-5246

御用聞き便専用番号 090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

寒い寒い。皆さん大丈夫ですか？今年の寒さでも、この寒さ、魚が最も美味しい時期に突入してるんです。
今回の広告は、牡蠣飯です。広島県生産量日本一!!もちろん広告の牡蠣も広島県産です。

牡蠣といえば、江田島に牡蠣屋の娘の友達がいいます。高校生の時、よく高速艇に乗り泊まりに行っていました。下が工場、上が家。朝方から、ガッシャーンと牡蠣を運ぶ音。家が揺れるほど…。それで目が覚める(笑)。牡蠣打ち体験も何度か経験。友達はその5秒くらい。「牡蠣を」コンコン叩いてクリッと…。これも言われた。「見て学べ」ベテランのおばちゃんにも言われた。今もゆい、店長。「うー」とかよく言われますが、「どう」「どう」も言わなくていい(笑)。

島での牡蠣は、身もプリッとして、風味も強いのを思い出す。海をバックに炭火で焼く。懐かしい。青春時代。戻りたいー(笑)。20年前…。

先日、広告用の牡蠣飯の写真とどりをした後、新入社員長崎くんに試食して「いいよー」と伝えると、写真とどりをした方ではなく、明らかに量の多い炊飯器の牡蠣飯を全てトレイ出して「てんこ盛りで、めちやくちや」ニコしながら美味しそうに食べてるんです。勝手に量の多い方を!!「幸せーじゃね」と、思わず言う。「めちやくちや美味い。牡蠣やばいですね。プリッと感。」と食レボ頂きました(笑)。牡蠣美味いんです。今。

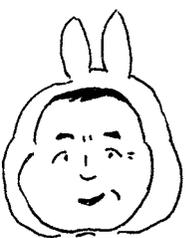
皆さん、朝から炊きますよー。自家製の牡蠣の出し汁で、この釜でフル回転!!

是非ご来店お待ちしております。

西田鮮魚店 副店長 越道 裕子

将来Ⅲ

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



またひとつ私の思い出の建物が姿を消した。

市役所の正面を真つ直ぐ伸びる商店街が、軽トラ一台通るのがやっと、もちろん舗装などされていない、まだ狭い狭い小路だったころ。父はそこに店を構えた。伯父(父の兄)が経営する『西田食料品店』の正面に。『西田鮮魚店』。しかし、『西田鮮魚店』とは誰も呼ばなかった。『西田の魚屋』。近くに『左近の下駄屋』『広沢のお好み焼き』『西川の花屋』があった。洋食の『銀河』も覚えている。

小学生の私に身近だったのは、貸本屋の『カナリヤ』。漫画を借りた借りた。駄菓子もあつた『カナリヤ』。店で、母から10円もらい、ほぼ毎日。

その先の中央通りとの交差点に、その店はあつた。

『赤門マーケット』。

スーパーマーケットという言葉さえ、あつたのか無かつたのか。とにかくそのころ。

昭和30年代だ、小学生の私でなくても、3階建てのその建物は、この上なく大きく立派に見えたらう。食品が山と積まれた店内に圧倒されもした。

時代の先端をいく店。『西上デパート』『だてデパート』そして『赤門マーケット』は別格だった。

『わん公』というあだ名をもつ同級生がその『赤門マーケット』の次男坊。小学生時代、仲よしだった。彼は成績もよく、スポーツもでき、顔立ちも良く、なにより背が高かつた。小学校の6年間、同じクラスだったが、いつも彼がいちばん後ろ。私は後ろから二番目。どうしても抜けなかつた(中学になって一気に追い抜いたが)。どことなく品のある、ええとこの子、そんな感じ。その彼が住む『赤門マーケット』は、店の威容と共にずっと私にとっての特別なメモリアルだった。

その後、道路が拡張されるとき、店の一部を削り取られ、狭くなったのだらう。時代の流れもあつたのかもしれない。往年の繁盛は消え、いつしか店も無くなり、建物だけが所在なげに立っていた。しかし、それでもなお、私の目に映る『赤門マーケット』はメモリアルであることに変わりはなかつた。

その『赤門マーケット』が解体された。寂しさはある。でも、少しホッとしている。取り残されたように立つ、その姿は痛々しかったから。

今、私は庄原の町のメモリアルを消す仕事にやつきになっている。

『ジョイフルの解体』。

『新しい時代の庄原のメモリアルたる場の創造』。

物騒なことを言うようだけど仕方ない。今のジョイフルの建物は大きすぎるし、古すぎる。いたるところで修理・修繕が必要。そして、なにより耐震構造を満たしていない。改修とか、リニューアルとかいうレベルでは追いつかない。

と云って、悪いことばかりではない。壊すということとは、『新しい何か』を創ることができるといふことでもあるのだから。チャンスだ。ピンチはチャンスとはよく言ったもの。

ところが、この解体が難しい。「離婚は結婚の何倍ものエネルギーが必要だ」と聞いたことがある。例えば適切ではないかもしれないが、まあ似たような感じだ。

今年の1月4日の中国新聞。呉・東広島島のページに大きく取り上げられていた記事が目にとまった。

『動き出す呉駅周辺再開発』

呉市のJ.R呉駅周辺再開発がようやく動き出す。ことしは閉店から10年がたつ旧そごう呉店を解体。跡地には商業施設やマンションが入る複合ビルが2026年度にも完成する見通しだ。国の直轄事業で行なわれる交通ターミナル整備を含め、玄関口のにぎわい復活に向けて期待が高まる。

呉駅の裏にある『すし鮮』『カルビ屋大福』も、もう20年たつ。その間、何度か駅前再開発の話が浮かんでは消えた。たぶん、いちばんの障害は、『そごう』の建物をどうするかという問題だったのではないかと思う。記事の中にこうある。

8階建ての建物の屋上には、子どもの歓声が響いた遊園地の名残がある。洋風の城をイメージさせる円すい形の飾り柱やステージ跡、(中略)かつて化粧品売り場などがあつた2階。シャンデリアが飾られた跡や華やかさを感じさせる赤茶色の柱が残る。

この建物は、1990年の優秀建築物に指定されていたという。

誰だって、こんな立派な建物を壊すのは惜しい。それに、8階建のビルだ。壊すのに、いくらかかるか。考えれば考えるほど、なんとか、これを利用したくなるのが人情というもの。だから動けなかつた。しかし、やはり、解体を決意するところから、再開発は動き出したのではないだろうか。

それでも、完成予定は2026年だ。3〜4年後。一朝一夕では進まない。

去年、『ジョイフル』は2025年秋のオープンを目指すと言った。しかし、解体費用が予測を超えそうなことと、個店、個店の事情があり頓挫しかけている。ここで足踏みしてはいけない。時間の流れを止めてはいけない。そう思うのだが、なかなか……。

※去年12月21日の庄原市議会の本会議で、林高正議員が『ジョイフル一帯の市街地での役割』について、一般質問で取り上げてくれました。事前に、私へのヒアリングもありました。核心を思っています。市の答弁も前向きでした。スマホでも『林高正ユーチューブ』で見れます。ぜひ。



取り壊しが決まった呉そごう